

第30回 ('19)

書学書道史学会大会

於：東京国立博物館（平成館大講堂）

10/26 sat.

12:50~ 受付開始
13:20~14:20 開会式・総会・特別表彰
第30回大会記念シンポジウム
14:30~16:00 中村 伸夫
河内 利治 富田 淳
信廣 友江 笠嶋 忠幸

第30回大会記念講演

16:10~17:40 蘇 士澍 氏
18:00~19:30 懇親会

10/27 sun.

09:00~ 受付開始
研究発表
09:30~10:00 ①安藤 喜紀
10:00~10:30 ②池田 絵理香
10:30~11:00 ③前川 知里
11:00~11:10 休 憩
11:10~11:40 ④井田 明宏
11:40~12:10 ⑤志民 和儀
12:10~13:30 記念撮影・昼食
13:30~14:00 ⑥下田 章平
14:00~14:30 ⑦永由 徳夫
招待発表
14:30~15:20 山本 堯 氏
15:20~ 閉会式
総合文化展自由参観



本年度大会会場の東京国立博物館へのアクセスは、下記のとおりです。

アクセスマップ



- 当印刷物は、大会当日にお持ちください。
(入館時に**会員の確認として使用する**場合があります)
- カラー版は、ホームページで確認できます。
- 大会用ポスターのデータをホームページにアップします。
必要に応じてプリントアウトし、関係各所にご掲示ください。

構内マップ



書学書道史学会
ASSOCIATION FOR CALLIGRAPHIC STUDIES
<http://shogaku-shodoushi.org/>

大会関係各種連絡事項

※会場の都合上、**例年とは異なる箇所が多々あります**。必ず下記をお読みのうえ、ご参加ください。

- 大会参加申込みは、必ず同封の「大会出欠確認はがき」に必要事項をご記入の上、10月16日(水)必着**でご投函をお願いします。
- 大会参加費(資料代含む)・懇親会費は、同封の「払込取扱票」に☑し、10月16日(水)までに納入してください**。念のため、振込控えは大会当日にお持ちください。
- 本学会大会では、例年ですと、会員の方が非会員の同伴参加を認めています。しかしながら、今大会では諸事情により、**同伴を認めません**。従って、例年の「会員1名につき、同伴非会員1名が無料」等の扱いはありません。「大会出欠確認はがき」および「払込取扱票」には、**会員ご本人のみ**でお願いします。
- 大会参加費は、会員 2,000円、学生会員 無料です。
- 懇親会参加費は、会員 5,000円です。今大会は、**学生会員も同額**です。
- 27日(日)の昼食については、例年ですとお弁当の事前の注文希望を行っておりました。しかしながら、**会場の都合上、食事場所が十分に確保できません**ので、今大会では**お弁当の受け付けは行いません**。**会場近くの飲食店にて昼食をお済ませくださいますようご協力お願いします**。
- 会場の都合上、**飲食可能な場所は限られております**。発表などが行われる**大講堂も飲食禁止**です。**飲食する際は、必ず係の指示に従うようにしてください**。
- 当日は、必ず**東京国立博物館通用門(西口)からご入館**ください。その際、スムーズな**会員の確認方法として当印刷物のご提示をしていただく場合があります**。**必ず当印刷物をお持ちください**。
- 「第30回シンポジウム」および「記念講演会」は、下記の条件の下、事前の申込みが不要で聴講無料**です。非会員や学生にもお知らせ、お勧めいただければと思います。
 - 条件1** 東京国立博物館にて開催の**特別展(御即位記念特別展「正倉院の世界—皇室がまもり伝えた美—)」半券を提示**してください。
それ以外の入館券類では、入場できません。
 - 条件2** **席数未定で、先着順**です。座席は**後方のみ**の開放とし、**満席の際は、ご入場をお断り**します。
 - 条件3** **東京国立博物館正門からご入館**のうえ、**平成館エントランス左の〈ラウンジ〉学会受付**にお越しください。

	大会参加	懇親会参加	計
一般会員	○	○	7,000円
	○	×	2,000円
学生会員	○	○	5,000円
	○	×	0円

- 年会費未納の方は、「払込取扱票」に記載の未納分を合算して速やかにお振込みください**。
- 懇親会は、大会初日の26日(土)18:00より、グレースバリ上野公園前店で行います。
- 宿泊ホテル等については、すでに会報でお知らせしたとおり、**役員・会員ともに事務局では一切手配しません**。
- 大会当日の緊急連絡先は、事務局長・高城の携帯(090-9684-9782)とします。

第30回('19)書学書道史学会大会プログラム

今年度の大会は、10月26日(土)・27日(日)の両日、東京国立博物館(平成館大講堂)において開催します。日程の詳細が決まりましたので、ご案内申し上げます。研究発表に加え、第30回大会を記念したシンポジウムおよび講演会を企画いたしました。多数のご参加をお待ちしております。

〈日 程〉

(会場は東京国立博物館・平成館大講堂)

【10月26日(土) 第1日目】

- 11:00~12:50 理事会(小講堂)
12:50~ 受付開始(大講堂前)
13:20~14:20 開会式・総会・特別表彰(大講堂)
14:30~16:00 第30回大会記念シンポジウム(大講堂) ※聴講無料
「書学書道史研究の課題」
司会：中村伸夫(筑波大学)
パネラー：河内利治(大東文化大学) 富田 淳(東京国立博物館)
信廣友江(安田女子大学) 笠嶋忠幸(出光美術館)
16:10~17:40 第30回大会記念講演(大講堂) ※聴講無料
「近百年の中日書法交流について」
講演者：蘇士澍氏(中国書法家協会主席)
通訳担当者：張莉氏(大阪教育大学)
18:00~19:30 懇親会(グレースバリ上野公園前店 TEL:0120-706-736)

【10月27日(日) 第2日目】

- 09:00~ 受付開始(大講堂前)
09:30~12:10 研究発表(大講堂)
①09:30~10:00 「黄腸石の文と刻——任城漢墓及び北莊漢墓の「薛〇〇」を中心に」
安藤喜紀(大東文化大学大学院生)【司会：小川博章】
②10:00~10:30 「雁塔聖教序・記の複雑刻について——筆画に沿う極細線の意味を考える——」
池田絵理香(大東文化大学大学院生)【司会：鍋島稲子】
③10:30~11:00 「第五回内国勸業博覧会と付博覧としての書画」
前川知里(大東文化大学大学院生)【司会：高橋利郎】
11:00~11:10 休憩
④11:10~11:40 「後漢時代の鎮墓瓶における書法の二系統性について」
井田明宏(筆の里公房)【司会：矢野千載】
⑤11:40~12:10 「二つの墨跡本「神龍半印蘭亭序」をめぐって」
志民和儀(公益財団法人 日本習字教育財団)【司会：菅野智明】
12:10~13:30 記念撮影・昼食
13:30~14:30 研究発表(大講堂)
⑥13:30~14:00 「和刻本「淳化閣帖」の伝本系統に関する一考察——惺堂旧蔵被齋本を中心として——」
下田章平(相模女子大学)【司会：柿木原くみ】
⑦14:00~14:30 「日本書論から見る王羲之〈書聖〉考」
永由徳夫(群馬大学)【司会：森岡隆】
14:30~15:20 招待発表(大講堂)
「殷周金文の復元鑄造」 山本堯氏(泉屋博古館学芸員)
15:20~ 閉会式(大講堂)
総合文化展自由参観(平成館)

発表者への連絡事項

- 発表者の持ち時間は、30分(発表時間20分、質疑応答10分)です。発表に際しては、時間厳守でお願いします。
- 発表者各位においては、**発表資料は、A3版両面印刷最大5枚まで（複数枚の場合は綴じること）として200部をご作成いただき、10月23日(水)までに**、下記の宛先へ送付をお願いします。
〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9
東京国立博物館内 富田淳研究室
☎03-3822-1111（代表）
※送付伝票備考欄に「書学書道史学会研究発表資料在中」と記載してください。
- 発表会場にはプロジェクターが設置されています。ご利用の場合、当日、USBメモリー等をご準備ください。試写は、研究発表前の空き時間を適宜ご活用ください。なお、プロジェクターを使用される方は、資料送付の際に、その旨をお知らせください。
- 各発表の司会者は、専門分野を考慮の上、振り当てました。ただし、諸般の事情により、司会者に変更が生じる場合があります。

役員・幹事各位へ

- 理事・監事・諮問委員各位においては、必ず同封の「大会出欠確認はがき」にて理事会出欠のご回答をお願いします。幹事各位においても、同様に資料封入作業の出欠のご回答をお願いします。**いずれも、昼食準備数を把握する関係上、ご回答にご協力ください。
- 幹事各位には、資料封入作業のほか、受付や大会運営のご協力をお願いしていますので、ご承知おきください。
- 役員・幹事各位においても、必ず東京国立博物館通用門（西門）からご入館ください。**
会場の都合により、**展示室などとの通り抜けができない**ようになっております。
- 理事・監事・諮問委員の方は、10月26日(土)11:00より「第69回定例理事会」を開催いたしますので、理事会開催会場の「小講堂」（平成館1階）へご参集ください。**
- 幹事の方は、10月26日(土)10:30に事務作業を行う「小講堂」（平成館1階）へご参集ください。**

①黄腸石の文と刻——任城漢墓及び北莊漢墓の「薛○○」を中心に

安藤 喜紀

近年、『任城王漢墓出土黄腸石題刻全集』（以下『任城全集』）、『中山王漢墓出土黄腸石題刻精拓百品』の出版や、「新出土の書——拓本の魅力——」展（謙慎書道会）での展示など、黄腸石への注目が高まりつつある。北莊漢墓（中山王漢墓）・任城漢墓からは「魯の柏仲」などの同文の黄腸石が認められること、両墓の建造年代の差は10～15年と非常に近いことが指摘されているものの、先行研究では出土地単位に止まり、出土地をまたいだ横断的な研究はまだ行われていない。しかし、同文の黄腸石を比較していくと、刻出される文字の中には風格の近いものが含まれるなど、横断的な研究の必要がある。

本発表では、両漢墓黄腸石中の「薛○○」の文を有する一類について、以下の三点を明らかにする。

- (1) 『任城全集』所収拓本と淑徳大学書学文化センター所蔵任城黄腸石拓本とを比較し、「薛」字が見える同石の拓本間の一部に磨泐・補刀と見られる字画の変化があること。
- (2) 両墓の黄腸石に見られる「薛」字は、これまで一様に地名と解釈されてきた。しかし、その用法を他の刻文の語法との比較を通して考察した結果、地名「薛」のほかにも姓「薛」が含まれていること。
- (3) 黄腸石間の同字に着目すると、同文の場合には、類似の字形が見出せる一方、別文では横画の長さや間隔に違いが生じている。そのことから黄腸石の工人・文の形式・刻の様式の間には一定の関連性があることがわかる。つまり、同文の黄腸石の刻出までの過程には、ごく少数の人物しか関わっていないと考えられる。この点を踏まえて、北莊・任城両墓の黄腸石に共通して見られる人名「顔伯」を含む刻文を比較すると、同一墓内での類似性と同様の類似性が認められる。すなわち、「顔伯」を含む刻文の黄腸石には出土地をまたいで同一の人物が関わっていたとみられること。

本発表では以上の三点をもとに、黄腸石における文と刻の様相の関連性について、その一端を明らかにする。

（大東文化大学大学院生）

②雁塔聖教序・記の複雑刻について

——筆画に沿う極細線の意味を考える——

池田 絵理香

雁塔聖教序・記には、一筆で書いた点画を刻したとは考えがたい不思議な刻が散見される。本発表では、その一部は褚遂良が極細の線で下書きをした後に、肉付けをして仕上げたことによる可能性があることを論じたい。

両碑にみえる不思議な点画について、古くは松田南溟・比田井天来の両氏が愛用した拓に、金泥と朱墨の三四八箇所のあることが知られていた。これまでの先行研究を整理すると、各氏の見解は次のA～Fの六点に分けられる。

A 褚遂良による切筆や敗筆とする説（貞政研司氏一九九五年、趙宏氏、程若氏二〇一九年）。B 褚遂良自身が時期を隔てて草稿に補筆修正し、行書から楷書へ修正したとする説や、手書きの書から銘石書へ修正したとする説（荒金大琳氏一九九八年、李夢媛氏二〇一四年）。C 刻者が毛筆の書きぶりを再現するために、分割刻法を施したとする説や、主筆に補刀し装飾を加えたとする説（石川九楊氏一九九九年、程若氏）。D 文字の輪郭と枠内の彫りに深淺の差があったとする説（程若氏）。E 石の摩耗や破損によって元の字が失われたとする説（白鶴氏二〇〇七年、馮玉春氏二〇一〇年）。F 後世の人が摩滅した点画をほじくったか、刀を入れたとする説（李峰氏二〇一七年、程若氏）である。

しかし、例えば「其」（序071 番号は各碑内の通し番号を指す）の六画目や、「教」（記016）の三画目に沿う極細線の存在には、ほとんどの人が気づいていない。唯一、上掲の程氏だけは、文字全体が明らかに太細の線で二重に書かれた用例「之」（序216）を挙げるが、現時点では解釈できないとしている。

本発表では、程氏が未解決例として挙げた「之」字を含む刻は、褚遂良が下書き（細い線）と肉付け（太い線）の二つの過程を経て書いたために生じた可能性のあることを複数の例から論じたい。そして上記の用例から類推すると、褚遂良書法晩年の特徴である、極度に抑揚の効いた点画は、二度書きによって書かれた可能性のあることにも言及したい。

（大東文化大学大学院生）

③第五回内国勸業博覧会と付博覧としての書画

前川 知里

明治三十六年、大阪において第五回内国勸業博覧会（以下内国博）が開催された。内国博における書の部門設置状況については、これまで多くの研究者が指摘しているように、第①回内国博では書画から書と絵画に分離したことによって書の部門が設けられることはなかった。一方で、第五回内国博の会場内には全国書画倶楽部が設置され、ここに渡辺沙鷗や中根半嶺といった書家も参画している。加えて泉布観では、藤澤南岳や森琴石など書画家としても著名な人々の手によって千瓢会が催され、さらに日本美術協会大阪支会による豊公遺物展覧会や東洋美術奨励会による全国新書画展覧会といった書画にまつわるイベントが複数開催されている。これらはいわば付博覧として設置されたものである。

第五回内国博におけるこれらのイベントは博覧会協賛会の支援を受けて設置されており、したがって広義の意味での第①回内国博に書は内包されていたと捉えることができる。そして、これらの設置は大阪だからこそ為し得たという側面もある。近世の大坂は木村兼葭堂や岡田米山人といった文人が多く住まう土地であった。江戸や京に比べ、幕末の動乱の影響が少なかつた大坂では、その文化環境が明治まで持ち越されることとなる。明治三十六年当時、大阪において文化の中心としての役割を果たしていた大阪博物館内の美術館では書と絵画を分け隔てなく展示しているように、近代の大阪には書画概念が強く根付いていた。加えて、明治5年から開催された京都博覧会では付博覧という博覧会を盛り上げるためのイベントとして書画揮毫席を設けているように、関西の博覧会では付博覧が定着していた。これらを背景に、第五回内国博では付博覧として書画に関わるイベントが設置されたと考えられる。

本発表では、先行研究においてあまり言及されてこなかった第五回内国博の付博覧に着目し、藤澤南岳の日記や博覧会の記録を通してその実相を具体的に確認することによって、これまで書とは切り離されて開催されたと捉えられてきた第五回内国博が、実際には書画世界と密接な関わりを持っていたことを明らかにしたい。

（大東文化大学大学院生）

④後漢時代の鎮墓瓶における書法の二系統性について

井田 明宏

鎮墓瓶とは被葬者の安寧と遺族の繁栄を祈念する文章を、陶器（多くは灰陶）の側面に書写し、副葬品として随葬したものをいう。後漢時代中期から南北朝時代まで使用が続いたとされるが、特に後漢時代後期に制作されたものが多く出土している。本発表では後漢時代の鎮墓瓶の書法を対象とする。鎮墓瓶について、これまでに考古学、思想史研究において検討が試みられてきた。その成果として、鎮墓瓶の器形、墓内への配置方法が大きく二つの系統に分かれること、さらにその二系統が、陝西省型と河南省型に大別されることが挙げられる。

一方、書法史においては、通行書体が使用された例として鎮墓瓶に注目し、検討したものが多く。しかし、これらにおいては上記した鎮墓瓶の二系統性は考慮されていない。本発表では、鎮墓瓶の書法について、二系統性を考慮した上で検討を試み、そこで得られた結果を先行研究と関連付けて考察することで、鎮墓瓶の二系統性の実態を書法の側面から明らかにすることを目的とする。

後漢時代の鎮墓瓶は通行書体で書写されたものばかりではない。現在確認できる後漢時代の鎮墓瓶を調査した結果、全体の約四割で当時の正式書体である八分の使用が認められた。さらに書体と出土地との関係を見ると、八分の使用は河南省周辺、通行書体の使用は陝西省周辺に集中していることが確認できた。特に、陝西省周辺の鎮墓瓶の中に、紀年は八分、本文は通行書体で書写したものが複数含まれることから、鎮墓瓶の書丹者は二書体を書き分けることができたものと考えられ、書体を意図的に選択したものと推察される。

この書体選択における差異は、器形、墓内配置とともに、鎮墓瓶の二系統性を示す証左の一つとなる。他分野における研究成果に加え、後漢時代の洛陽と長安の関係性にも留意しながら、鎮墓瓶の二系統性の実態に迫りたい。

（筆の里工房）

⑤二つの墨跡本「神龍半印蘭亭序」をめぐる

志民 和儀

現在、「蘭亭序」諸本中、最も高く評価されているものは、「神龍半印蘭亭序」であろう。その証拠に、多くの高等学校芸術科書道の教科書で、教材として採用されている。

特に、現在、北京・故宮博物院に收藏され「八柱第三本」とも別称される墨跡本「神龍半印蘭亭序」は広く知られる。ところが、北京・故宮博物院には、墨跡本「神龍半印蘭亭序」が、少なくとも二種は存在するはずで、このことはあまり知られていない。管見の限りでは、この問題に言及した著述も見ない。図版で確認すれば容易に理解できることであるが、『中国美術全集書法篆刻編2』（人民美術出版社 一九八六）などに掲載される墨跡本「神龍半印蘭亭序」は、現在、教科書などに掲載される墨跡本「神龍半印蘭亭序」（本発表では「神龍A本」と仮称）とは、明らかに別本である。

本発表では、二つの墨跡本「神龍半印蘭亭序」の存在を紹介し、図版を用いて対校する。

また、上述のように、二つの墨跡本「神龍半印蘭亭序」が存在するのであるから、当然、「神龍A本」に附された跋文や、先賢の「神龍A本」に対する評価について、再検討されなければならない。しかし、限られた発表時間内で「神龍A本」の総合的再検討は不可能と考えられるため、今回は、よく知られる郭天錫、鮮于枢、項元汴三者の跋賛に限って検討を加える。

現在、高く評価される「神龍A本」ではあるが、上述三者の跋賛をはじめ、他の跋文にも多くの問題を指摘できる。それらの諸問題について、注意深く再検討すべきではないか、というのが本発表の主旨である。

（公益財団法人 日本習字教育財団）

⑥和刻本「淳化閣帖」の伝本系統に関する一考察

— 惺堂旧蔵掖齋本を中心として —

下田 章平

江戸時代の書道は和様と唐様によって展開され、後者に関しては北島雪山・細井広沢あたりから隆盛を見たという。この動向と軌を一にするように、唐様の手本となる法帖の輸入、そして廉価な和刻本も刊行されるようになった。「淳化閣帖」は北宋の太宗が淳化三年に内府所蔵の墨跡を摹勒上石させ、王著に命じて編次させた、実質上の集帖の祖といえるものであり、日本でもその和刻本が刊行されてきた。

和刻本「淳化閣帖」については、中田勇次郎、藤原楚水、宇野雪村、北川博邦、馬成芬らの諸氏の先行研究が具わるものの、実物の比較に基づく伝本系統の検討や、そのもととなった中国で刊行された「淳化閣帖」との関連性についてはあまり論じられてこなかった。そこで、本稿では吉澤鐵之氏所蔵の狩谷掖齋翻刻本（以下、掖齋本）を手始めに、静嘉堂文庫等の公的機関や個人が所蔵する和刻本「淳化閣帖」の実地調査によってその伝本系統を考察したい。このことにより、江戸時代における「淳化閣帖」の受容ばかりでなく、延いては当時の日中文化交流の一端の解明が期待される。

ところで、吉澤氏所蔵の掖齋本を知ったのは、発表者がこれまで探究してきた書画碑帖収蔵家の菊池惺堂の旧蔵に係るものであったからである。『書苑』五巻第二号（一九一五）によると、大正四年四月二五日に上野公園の東京美術学校で「法書会春季大会」が開催され、併催して行われた「墨跡法帖類」の展覽に、惺堂は架蔵の「肅府初印本閣帖」（成田山書道美術館蔵）、「寛延板閣帖」、「掖齋模刻本淳化祖帖」（吉澤氏蔵）の三帖を提供しており、吉澤氏所蔵のものはその一本と見られる。今回の検討では、惺堂が掖齋本を収蔵した経緯についてもあわせて検討したいと考えている。

（相模女子大学）

⑦日本書論から見る王羲之〈書聖〉考

永由 徳夫

王羲之を〈書聖〉として尊崇することは、書学領域においてはもはや常識となつてゐる。しかしながら、「書聖」の語は、『大漢和辞典』には「能書を褒めていふ詞。書道に傑出した人。、『漢語大詞典』には「指造詣最高の書法家。」とあるのみで、少なくとも日中の大型工具書では、王羲之に特定してはいない。いつから、また何によつて、王羲之は〈書聖〉として喧伝され、揺るぎないものとして定着していったのであろうか。

日本書論、特に江戸時代の唐様書論は、中国書論の精粹を摂取し、浸透させることで、我が国における書藝術観を樹立する基盤となつた。たとえば、蘇軾『東坡題跋』中の一条「書唐氏六家書後」の「真生行、行生草。真如立、行如行、草如走。未有未能行立、而能走者也。」は、貝原益軒『心畫軌範』（一七二二）にて紹介されて以降、松下烏石『圯上漫草』（一七五八）、澤田東江『東江先生書話』（一七六九）、市河米庵『米庵墨談』（一八一二）等、多くの日本書論に引用され、本家中国を凌ぐ定着を見た。この引用の繰り返しは、一々が原典『東坡題跋』に当たつたものとは考えにくく、所謂孫引きの形で定着が図られていったと考えるのが自然であろう。

〈書聖〉の謂いについても同様の状況があつたのではないかと推察する。『晉書』王羲之伝では「古今之冠」と称賛し、唐・李嗣眞『書後品』には「可謂書之聖也」と見える。時代ははるか清まで下り、朱履貞『書學捷要』に「夫右軍書聖也」とあるのが、直截的な〈書聖〉の初出であろうか。我が国では、『米庵墨談』に「至右軍入聖」、外岡北海『書學大槩執筆』（一八二四）に「書ノ聖トモイフ右軍ニ」、大夢狂人『小學吟嚙』（一八二六）に「古今の書聖」と見えた後、武田司馬『書學鑿要』（一八五〇）に「山陰父子ヲ書聖ト云モ」とあるのが〈書聖〉の謂いの初出ではないかと考えられる。今、改めて〈書聖〉の語のルーツを辿り、〈書聖〉としての王羲之がどのように形成され、普遍化していったのかを詳らかにしたい。

（群馬大学）

《招待発表》殷周金文の復元鑄造

山本 堯

殷周青銅器の鑄造技術は未解明の部分が多く、なかでも金文の鑄造法は古くより様々な仮説が提出されてきたが、いまだ明確な答えは得られておらず、最大の謎の一つとして現在まで残されてきた。発表者らは芦屋金の里にて殷周金文の復元鑄造を試行し、鑄造に成功するとともに、金文鑄造法の有力な仮説を実験によつて検証することができたため、その概要を報告する。

金文の復元鑄造を行ううえで特に重視したのは以下の三点である。一つは鑄型の材質。出土鑄型資料の成分分析によつて、外型と中子（内型）に用いた材質が異なつていた可能性の-high-ことが判明している。復元を行ううえで重要な手がかりであり、これまで漠然と想定されてきた「埋け込み」の技術的必然性を解明する鍵となる。二つ目は長文銘の製作。銘文が長いほど製作の難易度は上がるため、長文銘の製作を無理なく説明できる技法を解明しなければならぬ。三つ目は文字の形態的特徴。近年、シリコンを用いた型取り調査が進展し、金文の立体的な形態が明らかとなった。そうした形態的特徴を復元できる技法を提示する必要がある。

復元鑄造の結果、筆に泥水をつけて、中子に埋け込んだプレート上に塗り重ねるといふ技法が、解明すべきポイントを説明できる最も合理的な金文製作法であることが明らかとなった。この技法は、学史を振り返れば清朝の阮元が初めに提言したものであり、今回の実験はその妥当性を二百年越しに証明したことになる。

ただし、金文の製作技法にはある程度バリエーションが存在した可能性があり、それは時間的変化を内包する公算が高いと考えられる。これまで漠然と捉えられてきた殷周金文の書体変遷に対し、製作技法の変化という観点から合理的な説明を与える可能性が開かれたのであり、漢字形成史を考えるうえで重要な視座を提供するものと言える。

（泉屋博古館）

※本発表は、樋口陽介氏（芦屋金の里）との共同研究によるものである。